

今を生きる子どもたち

貧困と格差の拡大のなかで

③

「ここは僕にとって『癒やし』の場。『第二の家庭』なんだ」と話してくれたのはタカヒロくん。取材当時(15)。

思い出たくさん

まわりのことを考えずに遊んでいて、指導員に怒られたこと。楽しかったキャンプ。忘れられない思い出がたくさんあります。

タカヒロくんは父子家庭の3人兄弟の長男です。両親はタカヒロくんが小学校にあがる前に離婚し、妹2人は父親が、タカヒロくんは母親が育てました。その母親が急死

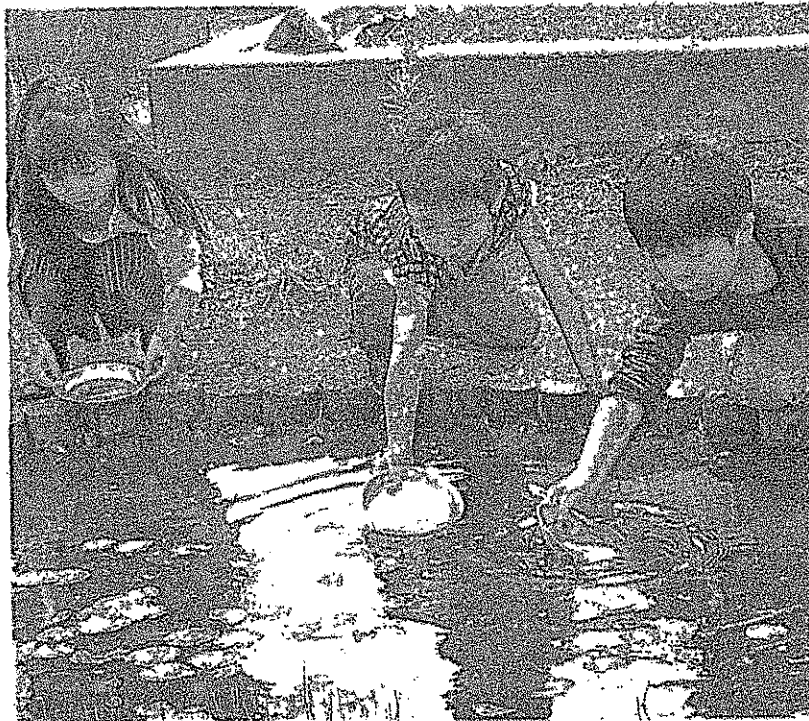
し、タカヒロくんは父親の元に、4年生のとき引っ越してきました。妹2人は学童保育に入っていました。年度の途中だったためタカヒロくんは入れませんでした。

父親が妹2人を迎えにくるまで、暗くなっても学童保育室の外で待つタカヒロくん。見かねた指導員が何かと声をかけ、学年が上がって入室できる日を待ちました。

翌年4月。ようやく入室でき、親子とも安心して放課後を過ごすことができるようになりました。

タカヒロくんは勉強も遅れていて、注意が必要な子どもと思われていました。何かあるたびに指導員が職員室に呼ばれました。「お宅のお子さ

"学童は大きな家族だよ"



学童保育で水遊びをする子どもたち (提供写真)

んが」といわれた父親がやり場のない怒りを表すこともありました。学童保育の指導員が、学校と父親とタカヒロくんの心をつないでいく役割を果たしました。

父母もつながり

指導員は、父親とよく話し合う努力を続けました。父母

会も父親とつながろうと働きかけました。

初めてのキャンプのとき、ほかの父親たちと一緒に子育てについて話し合うタカヒロくんの父親の姿がありました。「みなさんは殴らないですか?」「うちでは殴らないよ」「小学生になった手はあげない」。夜が更け

ても子育て談義は続きました。

タカヒロくんの父親は、だんだん行事に顔を出すようになり、子どもへの態度が変わっていききました。タカヒロくんがある日、いいました。「もう殴らないから、おまえもちゃんと考えろ」ってお父さんにいわれた」と。

タカヒロくんの父親はやがて、父母会の役員を積極的に引き受け、「キャンプはおともも楽しまなくちゃ」とリーダーシップを発揮するようになります。末の子の卒室後も父母会に関わり続けています。

タカヒロくんの父親が笑顔でいいました。

「よその子の成長を見るのも楽しい。お父さん、お母さん、先生、子どもたちにエネルギーをもらっています。学校は成績の話しかしないけど、学童は違う。ここはおっきな家族ですよ」(文中仮名)

(つづく)